

開発学の議論の根底にあるもの (特集 アジ研流読書案内 -- 研究者が薦める3冊)

著者	児玉 由佳
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	199
ページ	23-24
発行年	2012-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004002

開発学の議論の根底にあるもの

児玉 由佳

開発学は、「発展」途上国の「開発」について広く研究する学問である。経済学、社会学、文化人類学、そして環境や保健衛生の分野のような理系の分野まで、さまざまな研究分野をまたいで発展してきた。

それゆえに開発学「論」を語ることは難しい。「発展」とはなんなのか、「開発」とはなんのかといった哲学的な問いは、開発学の議論の中で、繰り返し現れる重要なテーマである。

一九九三年から九四年にかけて、私はイギリスの大学の開発学部の修士課程で学んだのだが、このような「深遠」な議論の存在を全く知らないまま開発学論の授業に飛び込むこととなった。日本語でも出なかったことのない概念、そして英和辞書では意味不明の訳しかない未知の単語にいきなり英語

で遭遇したのである。その当時は、ウィキペディアはおろか、インターネット自体が全く普及していない時代であり、議論の全体像がよくわからないまま、英和辞書と首つ引きで必死で課題をこなしていく日々を送ることとなった。

あとから振り返ってみれば、授業で展開された議論は、ポスト構造主義を敷衍したものであったといえる。授業では、過去のさまざまな開発政策―近代化政策、輸出代替工業化、ベーシック・ヒューマン・ニーズ、構造調整政策などが、どのように「発展」や「開発」を解釈した結果、生まれてきたものなのかを学んだ。それぞれの開発政策が拠って立つ価値基盤はどんなものなのか、人と社会構造との関係性をどのように解釈しているのかを念頭に置いて政策を分析することを求められたのであ

る。相反する主張がその時々につかりあって、弁証法的に発展してきたのが、現在の開発学であり、今後さらさらに変化し続けると考えられる。こういった思想に対して、私には基本的な知識もなく、英語の専門書だけでは理解しきれないことも多かった。

一方、日本では開発学がようやく認識されはじめた頃であり、アマゾンのようなオンライン書店も存在していない時代に、イギリスにいながらにして適切な日本語の本を探し出すすべもなかった。鳥居泰彦著『経済発展理論』（一九七九年）や西川潤著『経済発展の理論』（一九七六年）などに留学前に出会っていたら、ずいぶん授業も楽だったはずである。

そして日本に帰国後出会ったのが、絵所秀紀著『開発の政治経済学』（一九九七年）である。そこ

には、必死で辞書を引き引き学んだことが、平易な日本語で書かれていた。留学前にこの本を知っていたら（といってもまだ出版されていなかったのだが）という思いとともに、これから開発学を学ぶ学生は、まずこの本で開発学の基本を学べるということに対して、少し嫉妬を覚えたものだ。

さて、このような開発学をめぐる議論は、発展途上国の農民をどのようにとらえるのかといった点とも、深く関係している。

この議論と関係した本で、私にとつて思い出深いのは、J・C・スコット著『モラル・エコノミー』（一九七六年）である。前述の留学時代には、大量の文献に目を通したものの、英語の専門書を熟読する時間も英語力もなかった。恥ずかしながら、この本がきちんと読み通した最初の英語の専門書である。この本は、一九七六年に原書が出版されていてすでに古典的な存在であり、授業を通して虫食いの的に読んだりはしていた。しかし、最初から最後まで読み通したのは、それから五年後の一九九八年、アジア経済研究所の海外派遣制度でエチオピアに滞在していたときである。

当時の私は農村に家を借りて、質問票を片手に、農民や商人への訪問調査を行う日々を送っていた。現地語であるアムハラ語のみでひと月も生活していると、私の乏しい語彙力では人々とコミュニケーションをとるのにも疲れてくる。そのため、日本語のみならず、英語でさえも恋しい状況になってくる。そのような状況下で、村に持参していたのが、『モラル・エコノミー』の原書である。

一九九九年に日本語の翻訳がハードカバーで出版されているが、原書の方はペーパーバックで二五〇ページ足らずの手軽な本である。フィールド・ワークに疲れた時に、部屋の簡易ベッドに寝転がって読み進めていった。

本の内容は、かいつまんでいうと、東南アジアの小農たちの反乱の歴史を分析したものである。植民地化や都市化などのマクロな歴史の変遷とともに、地主や国家と小農たちとの関係性がどのように変化し、それに対して小農がどう反応したのかを描いている。壮大な歴史絵巻のような書きぶりに、興奮しつづき読み進めていったのを覚えている。自分が今いるのが、時と場所こそ違え発展

途上国の農村であり、そこで小農の人々の生活を調査しているというだけで、妙にこの本に親近感を抱いたものである。

ただし、このスコットの著作は、重要な参考図書として開発学の授業で挙げられていただけに、楽しく読みすすめられるだけではなく、さまざまな議論をはらんだ本でもある。いったい小農とはどのような存在なのかをこの本では問うている。小農は、歴史的变化に翻弄される非力な存在なのか、それとも変化に積極的に対応する主体的な存在なのか。

『モラル・エコノミー』では、これまで小農を庇護してきた地主が、都市化や植民地化による政治や社会の変化などで、地理的にも精神的にも小農から乖離していく過程が描かれる。その過程で、それまで築き上げられてきた「モラル」に基づいた地主と小農の関係性が失われていくのである。スコットは、それに対する小農たちの抗議として、東南アジアの各地で小農の反乱が起きたとする。そこで描かれる小農像は、単純に変化に翻弄される弱者ではない。ただし、同時に、本でははっきり言及されていないものの、変化に抵

抗する保守的な小農像が提示されているともいえる。

このスコットの小農像に対して、「モラル・エコノミー」論争と呼ばれる議論が起きた（詳細については、原「一九八五」を参照のこと）。小農は、変化に対してもつと柔軟に対応できるし、より積極的に変化を利用する合理的な存在であるという反論である。

『モラル・エコノミー』という本は、そういう意味でも、読み手にさまざまな反応を引き起こす本である。小農は、既存の社会構造に制約された存在なのか、それとも、個人で生計の向上を積極的にはかる合理的な個人なのか。「モラル・エコノミー」への批判は、たとえば、ミャンマーではそうだけれど、インドネシアでは違うといった、フィールド・ワークからの知見だけに基づいた単純なものではない。議論が進むにつれて、論じる者それぞれがもつ人間に対する価値観が露わになっていく。そして、その違いに自覚的でなければ、有益な議論とはならないし、論点を見誤ることになる。

この点は、フィールド・ワークにこだわっている私としては、つい忘れがちな側面である。目前の

事象を分析する自分自身がどうやってなにを分析しようとしているのか、自覚的でありたいものである。

（こだま ゆか／アジア経済研究所 アフリカ研究グループ「エチオピア地域研究、開発学」）

《参考文献》

- 絵所秀紀「一九九七」『開発の政治経済学』日本評論社。
- スコット、ジェームズ・C「一九九九」『モラル・エコノミー—東南アジアの農民反乱と生存維持』高橋彰訳。勁草書房(Scott, J. C., 1976, *The Moral Economy of the Peasants*, New Haven and London: Yale University Press)。
- 鳥居泰彦「一九七九」『経済発展理論』東洋経済新報社。
- 西川潤「一九七六」『経済発展の理論』日本評論社。
- 原洋之介「一九八五」『クリフォード・ギアツの経済学—アジア研究と経済理論の間で』リポポート。